



2025年度 第1回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2025年8月~12月)のポイント

海況

黒潮は潮岬以西では小蛇行の発達に伴い離岸傾向で推移し、潮岬以东ではC型^(※1)基調で推移するものの、9~10月にかけて一時的にA型^(※1)となる可能性がある。

沿岸水温は、潮岬以西は「**平年並**」^(※2)~「**高め**」^(※2)、熊野灘~遠州灘~相模湾は「**平年並**」~「**高め**」で暖水波及時に「**極めて高め**」^(※2)、伊豆諸島海域は「**極めて低め**」^(※2)~「**平年並**」で一時的に「**高め**」、房総~常磐南部海域は「**平年並**」~「**高め**」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

C型：八丈島の南を通過

A型：流路南端が東経136度~140度の間で北緯32度以南

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、

高め=平年値+1.5℃程度、

極めて高め・低め=平年値±2.5℃以上、

ただし、鹿島灘~常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

房総以北では前年並~下回り、相模湾以西では前年並または上回る海域が多い。

カタクチイワシ

前年並または下回る海域が多い。

ウルメイワシ

前年並または下回る海域が多い。

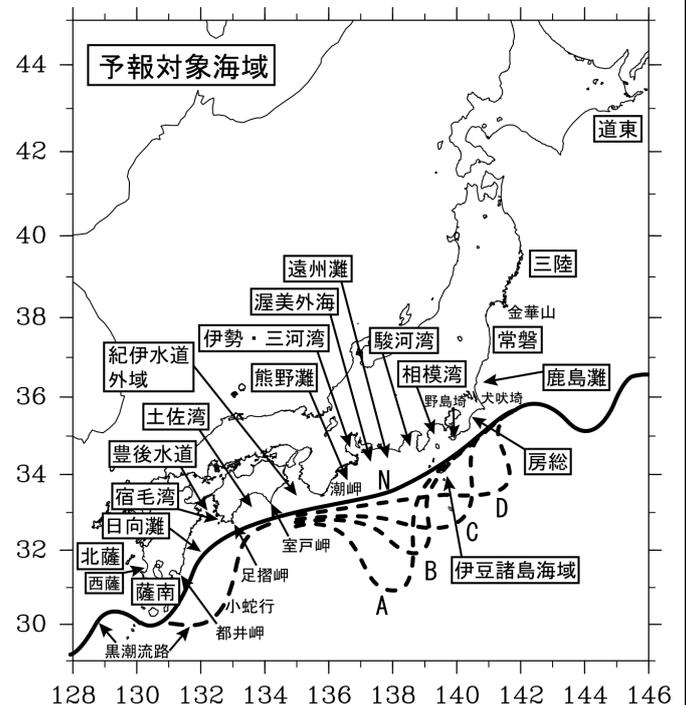
マアジ

前年を下回る海域が多い。

マサバ・ゴマサバ

マサバは前年並~下回る海域が多い。

ゴマサバは引き続き低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当

漁況：浮魚資源部(横浜) 大島、東口、木下、日野、安田、井須、上村

海況：海洋環境部(横浜) 亀田、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2025年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬～室戸岬沖では、離岸傾向で推移するものの、一時的に接岸傾向となることがある。
- ・潮岬沖では、接岸傾向で推移するものの、小蛇行の発達に伴い離岸傾向となる。

◎潮岬以東

- ・大規模なC型基調で推移するものの、9～10月にかけて一時的にA型となる可能性がある。
- ・熊野灘～遠州灘沖では、西からの小蛇行の発達に伴い離岸傾向で推移するものの、一時的に接近することがある。
- ・蛇行北上部が一時的に伊豆諸島海域の西側に位置することがある。
- ・房総沖では、一時的に離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・潮岬以西は、一時的に黒潮系暖水が波及する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島海域は、概ね冷水に覆われるが、一時的に暖水域となる。
- ・房総沖は、断続的に黒潮による暖水が波及する。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・断続的に黒潮による暖水が波及する。

(4) 沿岸水温

- ・薩南では、「平年並」～「極めて高め」で推移する。
- ・都井岬沖～紀伊水道外域は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島北部海域は、「極めて低め」～「低め」で推移するが、一時的に「高め」となることがある。
- ・伊豆諸島南部海域は、「低め」～「平年並」で推移するが、八丈島周辺では一時的に「高め」となることがある。
- ・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4.0～6.0℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

経過（2025年3月～2025年7月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・4月中旬までA型流路の大蛇行が継続した。
- ・4月下旬に大蛇行部が切離し、非大蛇行流路となった。
- ・6月上旬、遠州灘沖で蛇行が発達し、中旬以降は蛇行南端部が32°N以南に達した。
- ・7月上旬、蛇行南端部が八丈島～青ヶ島を迂回し、7月中旬以降、蛇行北上部が伊豆諸島の東側を通過することによりC型（大型東偏）流路となった。
- ・7月上旬、大蛇行から切離した渦が九州南東沖で黒潮に再結合し、小蛇行となった。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁は、3～7月中旬は「平均的な位置」で推移した。

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、3～4月は離岸傾向、5～6月は接岸傾向、7月は離岸傾向で推移した。
- ・足摺岬では、3～5月上旬にかけて「かなり離岸」～「著しく離岸」、5月中旬～7月中旬にかけて「接岸」～「やや離岸」で推移した。その後、小蛇行が形成され、通過とともに「著しく離岸」で推移した。
- ・室戸岬沖では、3～4月上旬にかけて「やや離岸」～「かなり離岸」、4月中旬～5月上旬にかけて「かなり離岸」～「著しく離岸」、5月中旬～7月中旬は「接岸」～「やや離岸」で推移した。その後、小蛇行が形成され、通過とともに「著しく離岸」で推移した。

◎潮岬以東

- ・4月中～下旬に蛇行の規模が縮小し、N型流路となった。
- ・6月以降、蛇行は東偏しながら再発達した。
- ・熊野灘～遠州灘～駿河湾～相模湾では、断続的に暖水が波及した。
- ・黒潮は3～7月上旬まで三宅島～御蔵島付近を北東～東向きに流れた。
- ・房総沖では、黒潮は4月上旬および5月下旬に一時的に離岸した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮系暖水の影響が継続的にみられた。

現況（2025年7月27日現在）

(1) 黒潮

- ・九州南東沖で発生した小蛇行が東方に拡大して室戸岬沖まで達している。
- ・潮岬以東では、C型（大型東偏）流路である。
- ・青ヶ島の南を迂回した後、伊豆諸島の東側を北上している。
- ・房総半島沖を北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・黒潮は、都井岬～室戸岬沖で「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

- ・熊野灘～遠州灘沖に、黒潮系暖水がみられる。
- ・伊豆諸島南部海域は、冷水が分布している。
- ・房総沖では、黒潮からの暖水が波及している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・沿岸付近で冷水に覆われている。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

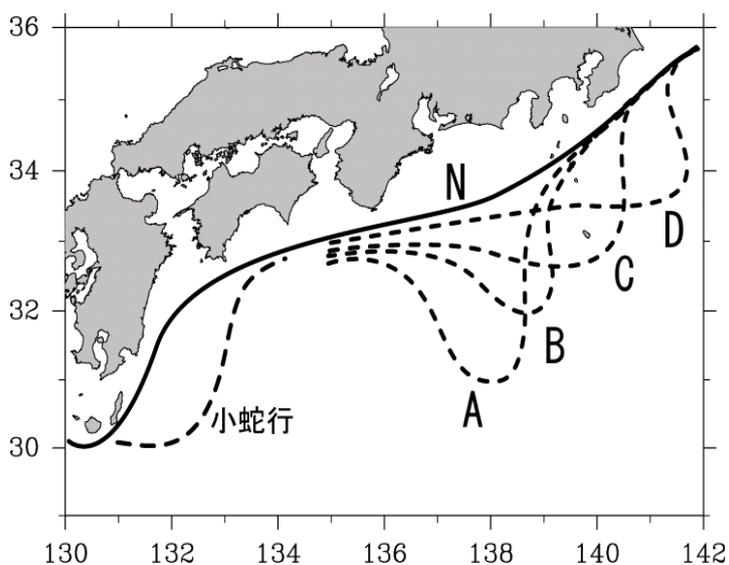


図1 黒潮流型の分類

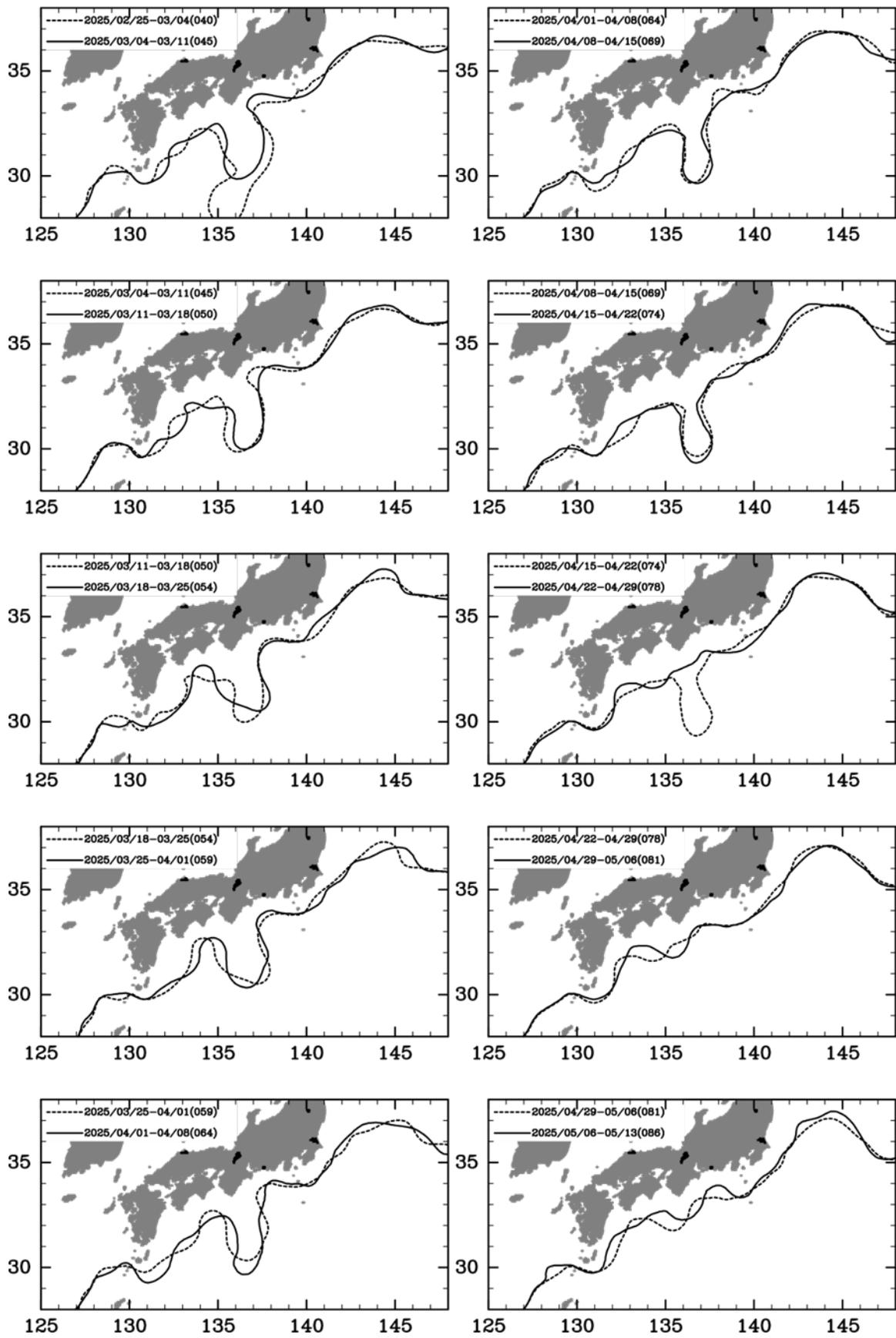


図2 黒潮流軸のパターン

(2025年3月~2025年5月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

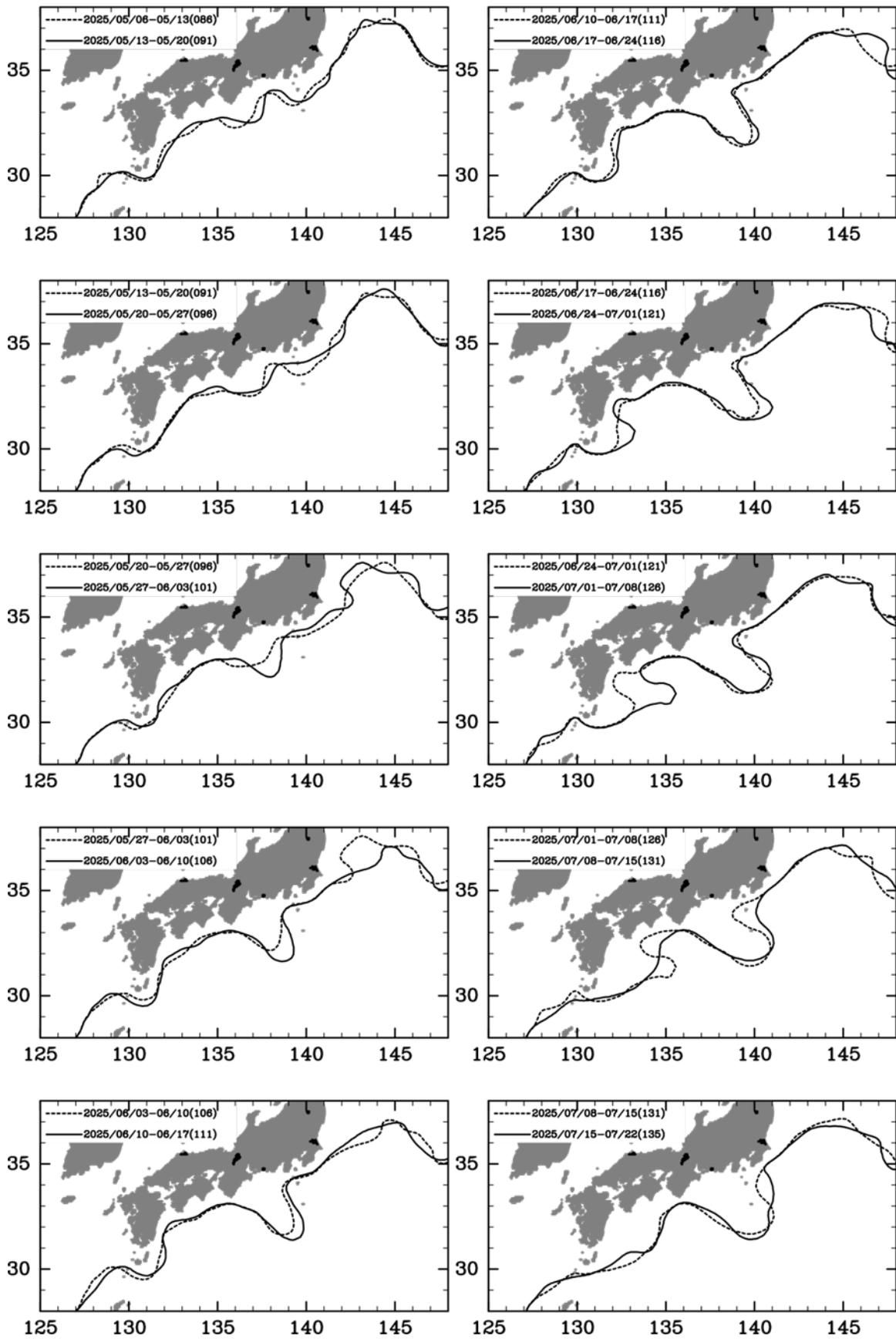


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2025年5月~2025年7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2025年8月～12月)

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2025年級群)、1歳魚(2024年級群)、2歳魚(2023年級群)、3歳魚(2022年級群)、4歳魚(2021年級群)、5歳以上(2020年級群以上)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年並。日向灘～豊後水道では前年を上回る。宿毛湾、土佐湾では前年並。紀伊水道外域西部では前年を下回る。紀伊水道外域東部～熊野灘では前年を上回る。

(2) 漁期：豊後水道中南部東側では8月～9月、その他の海域は期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩および薩南では12cm～16cm(0歳魚)主体。日向灘～豊後水道南部西側では12cm～18cm(0歳魚、1歳魚)主体。豊後水道中南部東側では12cm～16cm(0歳魚)主体。宿毛湾～紀伊水道外域では10cm～18cm(0歳魚、1歳魚)主体。熊野灘では11cm～17cm(0歳魚)主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢・三河湾～相模湾西部では前年を上回る。相模湾東部では低調であった前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10cm～15cm(0歳魚)主体に漁獲される。

3. 房総～三陸海域、道東海域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：房総～三陸海域では期前半は前年並～上回り、期後半は前年並～下回る。道東海域では前年並。

(2) 漁期・漁場：まき網は8月～10月は道東海域が主漁場となり、房総～三陸海域は小規模な漁場形成となる。11月、12月は三陸～常磐海域において漁獲される。定置網は各地で期を通じて散発的に漁獲され、12月以降に本格化する。

(3) 魚体：12cm～16cm前後(1歳魚)、15cm～18cm前後(2歳魚)、16cm～20cm前後(3歳魚)主体に漁獲される。

漁況の経過(2025年4月～6月)および見通し(2025年8月～12月)についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2020年には500万トンを上回った。しかしその後、加入量は減少傾向にあり、2023年の資源量は426万トンと推定された(2024年度資源評価)。

2020年級群(5歳)以上は、最近10年(以下、近年)において高い加入量の年級群で構成されている。

2024年における4歳以上としての漁獲状況は前年並であった。5歳以上の推定残存資源量は前年を上回る。

2021年級群（4歳魚）は、加入量が752億尾と推定されており、2020年級群を下回る水準となっている。2024年における3歳魚としての漁獲状況は、前年を上回った。2021年級群の推定残存資源量は、2020年級群の同時期を下回っている。

2022年級群（3歳魚）は、加入量が606億尾と推定されており、2021年級群を下回る水準となっている。2024年における2歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2022年級群の推定残存資源量は、2021年級群の同時期を下回っている。

2023年級群（2歳魚）は、加入量が351億尾と推定されており、2022年級群を下回る水準となっている。2024年における1歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2023年級群の推定残存資源量は、2022年級群の同時期を下回っている。

2024年級群（1歳魚）は、2024年における0歳魚としての漁獲状況（主に西日本海域）は、前年と同程度であった。沖合域においては、2024年5月～6月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）および6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）において前年並～下回るCPUE（Catch Per Unit Effort：単位努力量当たり漁獲量）が見られた。一方で、2024年9月～10月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）のCPUEは前年を上回った。現時点では不確実であるが、2024年級群の加入量は前年並～上回る水準と考えられる。

2025年級群（0歳魚）に対応する2025年の産卵量は、697兆粒（2025年6月までの暫定値）であり、2024年（325兆粒）を上回った。マシラスとしての漁獲は、伊勢・三河湾および駿河湾においては前年を上回っている。また、西日本の海域における未成魚としての漁獲は前年並～上回っている。一方で、2025年の沖合域の調査（5月～6月の移行域幼稚魚調査と6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査）におけるCPUEは、前年並～下回った。これらの情報から現時点では不確実であるが、近年は沖合加入群が資源の主体となっていることを踏まえ、2025年級群の加入量は、低調であった前年並～下回ると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

北薩～熊野灘での2025年4月～6月（以下、前期）の漁獲量は9,560トンと前年同期（5,340トン）を上回った。北薩～薩南海域および紀伊水道外域西部では前年を下回る漁獲となったが、その他の海域では前年を大きく上回る漁獲となっていた。

・来遊量：北薩～薩南海域では、0歳魚（2025年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の1歳魚（2024年級群）～2歳魚（2023年級群）の水揚量は前年と同水準であり、周辺海域では0歳魚の加入もみられることから、今期の来遊量は前年並と考えられる。

日向灘では、0歳魚、1歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲量は前年を上回っており、周辺海域では0歳魚の加入も見込まれることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0歳魚、1歳魚が漁獲の主体となる。0歳魚が漁獲の主体であった前期のまき網水揚量が前年同期を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道中南部東側では、0歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲状況が前年を上回っていることから、

今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0歳魚および1歳以上が漁獲される。1月～4月のマイワシのシラス漁況から、0歳魚の発生は前年と同様に低水準であると考えられる。また、前期の宿毛湾における中型まき網の水揚量は前年並であり、今期の来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域西部では、2021年以降、来遊量は低水準にあり、前期の漁況も低調であったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、今期の1そうまき網での漁獲量は少ない傾向にあるが、前期の棒受網の漁獲量は前年を上回った。これらのことから、今期の来遊量は、前年を上回ると予測される。

熊野灘では、0歳魚が漁獲の主体となる。5月、6月に主要定置網で、6月にまき網で0歳魚がまとまって漁獲され、熊野灘への加入が認められた。1999年以降において定置網による漁獲量（6月）とまき網による漁獲量（8月～11月）には、正の関係がある。2025年6月の定置網の漁獲量が前年を上回ったことから、今期のまき網による漁獲量は一定程度見込まれる。以上より、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

- ・漁期：豊後水道中南部東側では8月、9月が主漁期となる。その他の海域では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：北薩～薩南では、12 cm～16 cmの0歳魚が主体となる。日向灘～豊後水道南部西側では、12 cm～18 cmの0歳魚、1歳魚が主体となる。豊後水道中南部東側では、12 cm～16 cmの0歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では0歳魚、1歳魚が漁獲される。熊野灘では11 cm～17 cmの0歳魚が主体となる。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での前期の漁獲量は1,515トンと前年同期（7,426トン）を大きく下回った。

・来遊量：伊勢・三河湾では、0歳魚が漁獲の主体となる。マシラスは4月上中旬の短い期間しか漁獲されなかったことから、今期の漁獲対象は1群で構成されると予測され、追加の加入群が期待できないと予測される。しかし、マシラスの漁獲量が多かったこと、昨年より操業開始時期を遅らせているため漁獲される魚体が大きいことが想定されることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

駿河湾・相模湾西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。5月、6月の0歳魚の水揚量は前年を上回ったことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

相模湾東部では、0歳魚が漁獲の主体となる。2019年以降は8月～12月の漁獲量が低調に推移していることから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：主体となる0歳魚は10 cm～15 cm前後。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

房総～三陸海域のまき網での前期の漁獲量は9.1万トンであり、前年同期（6.1万トン）を上回った。道東海域のまき網での前期の漁獲量は0.7万トンであり、前年同期（3.1万トン）を下回った。房総以北の定置網等での前期の漁獲量は2.7万トンであり、前年同期（2.2万トン）を上回った。

・来遊量：各年級群の資源状態と前年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚～3歳魚（2024～2022年級群）を主体に0歳魚（2025年級群）および4歳（2021年級群）以上が混じって漁獲される。

資源状態および漁獲状況を考慮し、各年級群の来遊量について5歳以上は前年を上回る、4歳魚は前年を下回る、3歳魚は前年を下回る、2歳魚は前年を下回る、1歳魚は前年並～上回ると予測される。0歳魚の来遊量は、現時点での予測は困難である。房総～三陸海域においては、2025年7月現在、依然として鹿島灘に魚群が残存していることから、期前半の来遊量は前年並～上回ると予測される。前年には主漁期であった期後半の来遊量は、海洋環境に大きく左右されることから予測は困難である。一方、資源水準は前年を下回ることから、現時点では期後半の房総～三陸海域の来遊量は前年並～下回ると予測することが妥当である。道東海域においては、資源水準は前年を下回るものの、道東沖の暖水塊は前年よりも弱まっていることから、来遊条件は前年よりも良いと考えられ、来遊量は前年並と予測される。ただし、漁獲量はまき網の操業状況にも左右される。

・漁期・漁場：まき網は、8月～10月は道東海域が主漁場となり、三陸～房総海域は小規模な漁場形成となる。三陸～常磐海域においては11月、12月に漁獲される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲され、12月以降に本格化する。

・魚体：0歳魚は8 cm～14 cm前後、1歳魚は12 cm～16 cm前後、2歳魚は15 cm～18 cm前後、3歳魚は16 cm～20 cm前後、4歳以上は16 cm～21 cm以上。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2025年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2025年級群）、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～土佐湾、紀伊水道外域東部では予測が困難。紀伊水道外域西部および伊勢湾、渥美外海では前年並。遠州灘～駿河湾では8月は前年を上回るが、9月以降は予測が困難。相模湾では前年並～下回る。鹿島灘～常磐南部海域では前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域および日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年並。豊後水道東側、宿毛湾および紀伊水道外域西部では前年を下回る。紀伊水道外域東部では主たる漁獲対象ではない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm以上の1歳以上が漁獲される。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾および相模湾では前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、8 cm～14 cmの1歳以上が漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域では漁獲主体となる0歳魚は予測が困難、期序盤に漁獲される1歳以上は前年を下回る。常磐海域では主たる漁獲対象とならない。三陸南部海域～仙台湾では前年並。三陸北部海域では前年並～下回る。道東海域では、マイワシの来遊量が著しく少ない場合に漁獲の主対象となる可能性がある。

(2) 漁期・漁場：房総海域の2そうまき、三陸南部海域～仙台湾の定置網では期を通じて漁獲される。三陸北部海域の2そうまきでは9月以降。常磐～房総海域の1そうまきの主な漁獲対象にはならない。道東海域の1そうまきでは漁獲の対象となる可能性がある。

(3) 魚体：6 cm～9 cm前後の0歳魚、9 cm～14 cmの1歳以上が漁獲される。

漁況の経過（2025年4月～6月）および見通し（2025年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2002年の291万トンピークに減少傾向に転じ、2018年に9.3万トンの最小値となった後、増加に転じて2023年は26.2万トンと推定された（2024年度資源評価）。資源動向は親魚量の最近5カ年の推移から増加傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、

資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2024年度資源評価に基づくと、2023年級群（2歳魚）の加入量は300億尾と推定され、2022年級群の加入量を上回った。2024年における1歳魚としての漁獲状況は前年を上回った。これらのことから、2023年級群の残存資源量は、2022年級群を上回る水準であると推測される。

2024年級群（1歳魚）は、シラスや0歳魚として主産卵場である東海海域を中心に7月以降に漁獲され、2024年のその漁獲量は前年並であった。水産資源研究所が実施した沖合域の調査船調査では、2024年6月、7月における北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以降、北上期調査）の推定0歳魚のCPUE（全測点の平均CPUEで暫定値。以下同様）は前年を上回ったが、依然低水準であった。このことから、2024年級群は2023年級群と同程度の加入量であり、残存資源量も同程度の水準であると推測される。

2025年級群（0歳魚）は、現時点でその水準を予測することは困難である。2025年1月～6月までの産卵量（I～IV区の合計）は2,888兆粒であり、前年同期（1,576兆粒）を大きく上回っている。ただし、主要港における4月～6月のシラス水揚量は前年同期を下回っていることには留意が必要である。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

・来遊量：西薩～土佐湾、紀伊水道外域東部では、シラスの来遊量については予測が困難である。

紀伊水道外域西部では、瀬戸内海で産卵され、孵化したシラスが漁獲される。卵稚仔調査によると、2025年1月～6月までの産卵量および仔魚量は紀伊水道及び大阪湾では前年および平年（過去5年平均）を上回るが、播磨灘では前年および平年を下回ることから、来遊量は前年並と予測される。

伊勢湾、渥美外海では、4月～6月の漁獲量は低調であった前年を上回り、5月以降の卵稚仔調査によっても伊勢湾内で卵稚仔が確認されているが、現在まで伊勢湾内に内湾由来のシラスの漁場が形成されておらず、昨年同様の状況である。しかし、外海の底層水の流入等により伊勢湾内の環境が好転すれば漁獲につながる可能性があること、黒潮が非大蛇行流路に移行したことに伴い北上部が遠州灘沖となれば外海での漁場形成が期待できるため、来遊量は前年並と予測される。

遠州灘～駿河湾では、潮岬～遠州灘西部（伊勢・三河湾内を除く）における5月～6月のカタクチイワシ産卵量（卵稚仔調査）と8月の主要6港シラス水揚量に正の関係がある。2025年の産卵量は30兆粒であり、この関係式に基づくと8月のシラス水揚量は前年を上回ることから、来遊量は前年を上回ると予測される。9月以降は、現時点で情報が無いため予測が困難である。

相模湾では、周辺海域（相模湾および東京湾口）で1月～6月に実施した卵稚仔調査では、カタクチイワシ卵の平均採集量は124.7粒であり、平年（過去5年平均で71.4粒）および前年（84.6粒）を上回る水準であった。しかし、3月～6月のシラス漁獲量は卵の平均採集量と一致しておらず、7月以降に上向くかは不明である。そのため、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

鹿島灘～常磐南部海域では、黒潮続流の北偏傾向が弱まりながらも継続しており、8月以降の水温は平年より高い見込みである。また、茨城県沿岸のカタクチイワシ卵仔魚採集数は6月、7月と例年より多い傾向にある。黒潮続流の北限緯度、10 m深水温および卵仔魚採集数を説明変数に用いた統計モデルによる予測では、8月の漁獲量は約350トン（前年同月は195トン、同月の過去5ヶ年平均は580トン）になる。現在

も卵仔魚の供給が続いておりシラスに好適な水温が続く見込みであることから、9月以降もこの状況が維持されると推察されるため、来遊量は前年を上回ると予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

- ・来遊量：北薩～薩南海域では、今期の漁獲主体となる0歳魚（2025年級群）は、4月～6月の水揚量が前年を下回っていることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、近年は大羽群の漁獲がほとんどなく、8月～12月も沿岸発生群主体の漁獲になると考えられる。4月～6月の漁獲量は前年を下回っており、今後の来遊にも期待はもちにくい。また、近隣海域の来遊状況からも、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0歳魚が水揚げの主体であった4月～6月の水揚量は前年同期並であった。予測期間前半はマイワシやウルメイワシに混じって漁獲されることがあるためカタクチイワシとしての水揚量に反映されない可能性があるが、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道東側では、周辺海域で発生したと推定される被鱗体長10 cm以下の0歳魚が漁獲の主体となる。4月～6月はカタクチシラスの水揚量およびまき網での未成魚・成魚水揚量が前年同期を大幅に下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾では、期を通じて0歳魚、1歳（2024年級群）以上が漁獲の対象となる。上半期（1月～6月）の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量と下半期（7月～12月）の中型まき網水揚量には有意な正の関係が見られる。上半期の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量とこの正の関係式から予測される下半期の中型まき網水揚量は前年を下回ることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、定置網において0歳魚主体に混獲される。4月～6月の漁況は低調であったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm以上の1歳以上が漁獲される。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

- ・来遊量：熊野灘では、例年、マイワシなどにわずかに混じって漁獲される。今期もまとまった来遊はないと予測される。

伊勢・三河湾では、冬季（前年12月、当年1月）のシラス漁獲量が比較的多かったため、夏以降に体長8 cm～9 cmの1歳魚（2024年級群）が漁獲されると考えられる。一方、秋以降に漁獲される春生まれの0歳魚（2025年級群）は、春季に外海から内湾へのシラスの来遊が限定的であったことに加え、内湾由来のシラスの漁場が現在まで形成されていないことから少ないと考えられる。しかし、前年から操業開始時期を遅らせており、前年よりも大きな魚体が漁獲されると想定されることから、来遊量は前年を上回ると予測される。

相模湾西部では、4月～6月の伊豆東岸大型定置7か統の水揚量は前年同期を上回っており、7月以降も

その傾向が続いている。例年、8月以降の定置網への入網は僅かであり、さらに近年は資源量が少ないため予測は不確実であるが、来遊量は前年を上回るものの、近年同様の低水準と予測される。

相模湾東部では、黒潮A型流路が継続している2018年以降、主要定置網の8月～12月漁獲量は数トンのレベルに留まっている（秋季に一時的にB型となった2020年を除く）。JCOPE2Mによる黒潮長期予測（7月10日発表）によると、大蛇行とは言えない状況で、次第に縮小すると予測されている。しかし、近年は不漁傾向が続いていることから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、8 cm～14 cmの1歳以上が漁獲される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、近年は期序盤に1歳魚が、期中盤以降に0歳魚がそれぞれ漁獲の主体となる。0歳魚（2025年級群）は、7月を中心に遠州灘周辺海域で発生する群に由来すると考えられるが、現時点で加入群に関する情報がないため、来遊量の予測は困難である。1歳魚（2024年級群）は、大部分が期の序盤に北上し、期中盤以降は徐々に漁獲されなくなるという近年の回遊傾向および6月までの来遊量が前年を大きく下回っていることを考慮すると、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。2歳（2023年級群）以上は1歳魚に混じる程度と考えられるため、来遊量は前年同様の低水準と予測される。予測期間中の漁獲主体は来遊量予測が難しい0歳魚であるため、全体としての来遊量の予測も困難であるが、産卵親魚の漁獲量が低水準であることから、近年同様の低水準と予測される。

常磐海域では、2017年3月以降水揚げがないため、来遊量の予測は困難である。1そうまき網は、サバ類やマイワシを周年漁獲対象としているため、まとまった漁獲はない。

三陸南部海域～仙台湾では、10 cm～12 cm台の1歳魚および6 cm～9 cm台の0歳魚に、11 cm～13 cm台の2歳魚が混じり、定置網で断続的な漁獲がある。前年は黒潮続流が北偏し宮城県沿岸は高水温となったため、カタクチイワシの北上が早く、低調な水揚げとなった。しかし、今期は、黒潮続流の北限緯度が異常に北偏した前年に比べ南方に位置しており、この状況が続けば水温は前年よりも低く推移し、カタクチイワシが滞留しやすい水温環境になると推測される。一方、千葉県の2そうまき網漁業では4月～6月の漁獲量が前年を下回ることから、8月以降に宮城県沿岸に北上来遊するカタクチイワシは前年を下回ると見込まれる。以上を勘案し、来遊量は前年並と予測される。

三陸北部海域では、近年の資源状態及び漁獲動向から、八戸沖で10月、11月に漁獲され、まき網では前年並～下回る、定置網では漁獲されないと予測される。

道東海域では、2024年9月、10月に道東太平洋海域で実施した調査船調査では、カタクチイワシが1,000尾以上漁獲されており、両調査のカタクチイワシCPUEはここ数年増加傾向にある。また、漁業においても、2023年以降2年続けて20トン以上のまとまった漁獲があった。したがって、道東太平洋海域へのカタクチイワシの来遊量は増加傾向にあると推測される。近年は、カタクチイワシに比べてマイワシの来遊量が圧倒的に多かったため漁業の主対象とはならなかったが、本予測期間におけるマイワシの来遊量が著しく少ない場合、カタクチイワシが漁獲の主対象となる可能性がある。

- ・漁期・漁場：房総海域の2そうまきおよび三陸南部海域～仙台湾の定置網では期を通じて漁獲される。三

陸北部海域の2 そうまきでは9月以降に漁獲される。常磐～房総海域の1 そうまきでは主な漁獲対象にならないが、道東海域の1 そうまきでは漁獲の対象となる可能性がある。

- ・ 魚体：6 cm～9 cm 前後の0 歳魚、9 cm～14 cm の1 歳以上が漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2025年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2025年級群）、1歳（2024年級群）以上。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩～薩南海域および日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年並～下回る。豊後水道東側および宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域では前年を上回る。熊野灘では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：0歳魚（8 cm～20 cm）が主体となる。海域により1歳以上（20 cm以上）も対象となる。

漁況経過（2025年1月～6月）および見通し（2025年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015年に4.9万トンと過去最高となったが、2016年以降の漁獲量は減少傾向に転じ、2018年以降は概ね3万トン以下であった。2024年の漁獲量暫定値は2.5万トンであった。余剰生産モデルにより算出された資源量指標値（平均値を1とする相対値）は、1979年以降緩やかに増加して1998年に0.95を示し、その後減少して2002年に0.75となった。2003年以降は再び増加し、2015年に過去最高となる1.78を示した。2016年以降は減少傾向が継続しており、2023年における相対値は0.94となった。これらのことから、2024年度資源評価において、減少傾向にあると判断されている。

2025年の資源量指標値は未推定であるが、太平洋および瀬戸内海（海区Ⅰ～海区Ⅲ、海区Ⅶ）の産卵量（前年9月～当年8月を1年とする）は、2016年～2024年にかけて減少傾向を示しながら35兆粒～205兆粒の間で推移している。2024年9月～2025年6月の産卵量は27兆粒であり、前年同期（2023年9月～2024年6月、34兆粒）を下回り、過去最低値を示した。以上のことから、親魚資源は依然低い水準にあると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

例年の傾向から、2025年後期（8月～12月）の漁況は0歳魚（2025年級群）が主体になると推測される。予測対象海域（鹿児島県～三重県）の主要港における前期（1月～6月）漁獲量と後期漁獲量には正の関係がある。2025年前期の漁獲量は3,178トンであり、前年同期（6,190トン）を下回った。2000年～2024年の前期漁獲量と後期漁獲量との関係を用いて、2025年前期の漁獲量から2025年後期の漁獲量を予測すると7.2千トンとなる。この値は2024年後期の漁獲量14,353トンを下回る。ただし、近年の実測値は予測値を上回る傾向がみられている。

北薩～薩南海域では、0歳魚、1歳魚（10 cm～17 cm）が漁獲対象となる。4月～6月のまき網における漁獲動向から来遊水準は前年並と考えられる。

日向灘では、0歳魚、1歳魚（13 cm～22 cm）が主体となる。4月～6月の漁獲量は前年を下回っており、その要因のひとつとして低水温であったことが挙げられる。沿岸海洋観測による日向灘の水温は3月～5月でやや低め～かなり低めで推移しており、低水温により来遊が遅れたと考えられる。8月～12月の水温は前年並～高めで推移する予測であることから、来遊水準は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、8月～10月は0歳魚（10 cm～20 cm）が主体となる。4月～6月のまき網漁獲量が前年を下回ったことから、来遊水準は前年並～下回ると予測される。

豊後水道東側では0歳魚が主体となる。加入時期にあたる4月～6月と当歳魚が漁獲の主体となる8月～12月において、両期間の漁獲量には正の関係が認められる。この関係から来遊水準は前年を下回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、0歳魚、1歳魚が漁獲される。宿毛湾の中型まき網における前期漁獲量と7月～12月の漁獲量との間には正の関係が認められ、この関係から来遊水準は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、0歳魚主体に混獲される。3月～6月の漁況は好調であったことから、前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1そうまき網による漁獲は近年無い。4月～6月の棒受網の漁獲量は前年を上回った。これらのことから、8月～12月の来遊水準は前年を上回ると予測される。

熊野灘では0歳魚（8 cm～20 cm）が主体となり1歳以上（18 cm～23 cm）も漁獲される。定置網における5月、6月の漁況が0歳魚主体に前年を大幅に下回っているため、来遊水準は前年を下回ると予測される。なお、熊野灘のまき網では、例年漁獲優先順位は高くないが、ここ数年の記録的な不漁状況下では本種に対する狙い操業が増加し、漁獲圧が高まる可能性がある。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2025年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2025年級群）、1歳魚（2024年級群）、
2歳魚（2023年級群）、3歳（2022年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域および日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年並～上回る。豊後水道東側および宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。

(2) 魚体：北薩～薩南海域および日向灘では0歳魚、1歳魚主体。豊後水道では0歳魚が主体。宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳以上は23 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域では前年を下回る。熊野灘では前年並～上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域では0歳魚、1歳魚主体。熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳魚は23 cm～27 cm、3歳以上は25 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：伊豆東岸では前年を下回る。西湘では前年並～下回る。

(2) 魚体：主体となる0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～22 cm。西湘では22 cm以上の2歳以上も含まれる。

漁況の経過（2025年1月～6月）および見通し（2025年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降は減少傾向に転じ、2015年には4.4万トンまで減少した。その後は横ばい傾向を示している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.2億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和6年度（2024年度）資源評価において、2023年の資源量は4.6万トン、親魚量は1.8万トンと推定された。

2022年級群（3歳魚）の加入量は4.3億尾と推定された。2024年の2歳魚としての漁獲は前年を上回ったが、残存資源量は少ないと考えられる。

2023年級群（2歳魚）の加入量は5.7億尾と推定された。2024年の1歳魚としての漁獲は前年を上回り、2024年の漁獲の主体となった。

2024年級群（1歳魚）の加入量を推定することは難しい。2024年の0歳魚の漁獲は前年を下回った。一方で、加入量の指標となる宮崎県南部定置網、宇和島港まき網、伊勢湾小型底びき網における0歳魚の指標値は前年を上回った。現時点での見積もりは不確実であるが、2023年級群と同程度と考えられる。

2025年級群（0歳魚）の加入量を推定することは難しい。2025年1月～6月の漁獲尾数（主要港集計、暫定値）は前年並みだった。各県地先の0歳魚の漁獲状況を4月～6月で比較すると、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）、宇和島港まき網ゼンゴCPUEは前年を上回り、宿毛湾まき網ゼンゴCPUEは前年並であった。一方で、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年を下回った。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚（2025年級群）：19 cm以下、1歳魚（2024年級群）：19 cm～25 cm、2歳魚（2023年級群）：23 cm～27 cm、3歳（2022年級群）以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では尾叉長20 cm台に3歳から10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。したがって相模湾については報告された年齢体長キーから判断し、0歳魚：19 cm以下、1歳魚：19 cm～22 cmとした。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、0歳魚（2025年級群）、1歳魚（2024年級群）が漁獲の主体となる。2025年4月～6月のまき網の漁獲動向から、今期（8月～12月）の来遊量は前年並みと予測される。

日向灘では、0歳魚（2025年級群）と1歳魚（2024年級群）が漁獲の主体となる。本海域の来遊量に係る要因のひとつに水温がある。沿岸海洋観測による日向灘の3月～5月の水温は「やや低め～かなり低め」、6月は「やや高め」で推移しており、漁獲状況に合致する。今期（8月～12月）の水温は「平年並～高め」で推移すると予測されていることから、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、0歳魚（2025年級群）、1歳魚（2024年級群）が漁獲の主体になる。2024年級群が漁獲の主体であった2025年4月～6月のまき網の漁獲量が前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

豊後水道東側では、0歳魚（2025年級群）が漁獲の主体となる。5月～6月と8月～12月の漁獲量には正の関係が認められ、この関係から判断すると今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では0歳魚（2025年級群）、1歳魚（2024年級群）が主体となる。宿毛湾中型まき網における上半期と下半期の漁獲量には有意な正の関係がみられる。この関係から判断すると今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、0歳魚（2025年級群）が主体で漁獲される。前期の漁況が低調であったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚（2024年級群）が主体で漁獲されると考えられる。前期の漁況が低調であったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

熊野灘では、1歳魚（2024年級群）主体に0歳魚（2025年級群）および2歳以上（2023年級以上）も漁獲される。前期のまき網の漁況から1歳以上の来遊量は前年を上回り、0歳魚については定置網の漁況から前年並みと考えられる。以上から、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、0歳魚（2025年級群）を主体に1歳（2024年級群）以上も漁獲される。1月～6月の漁獲尾数と7月～12月の漁獲尾数との関係式から今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

西湘では、0歳魚（2025年級群）と1歳魚（2024年級群）が主体に漁獲される。1月～6月の0歳魚漁獲量と7月～12月のマアジ総漁獲量には正の関係がある。この関係から判断すると、今期の来遊量は前年を下回る。しかし、今年の上半期には2歳（2023年級群）以上が例年より多く見られており、下半期にも引き続き含まれる可能性がある。これらのことを踏まえると、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

(4) 房総以北の漁獲情報

1月～6月の千葉県主要2漁港（銚子・鴨川）の漁獲量は185トンで、前年同期（1,329トン）を大きく下回った。房総～鹿島灘海域における北部まき網の1月～6月の漁獲量は10トン（TACシステム）と、前年同期（1,000トン）を下回った。今期の予測期間中、1そうまきはマイワシ、サバ、スルメイカを対象とした三陸海域以北での操業が中心となり、マアジは主な対象にならないと考えられる。本海域のマアジ漁獲は千葉県の2そうまき網によるものが中心になると考えられる。福島県では1月～6月に底びき網を主体に漁獲された。9月以降も底びき網主体の漁獲が見込まれる。

仙台湾以北では、宮城県の1月～6月の漁獲量は137トンで前年同期（301トン）を下回った。宮城県

沿岸の水温が前年を下回った影響で上半期の来遊が遅れたが、7月は前年同期を上回る漁獲となっていることから、今期の来遊量は前年並みと予測される。岩手県の2025年3月～6月の定置網による漁獲量は8.5トンと前年を下回った。青森県では2025年1月～6月の漁獲量は9トンで前年を上回った。近年の漁獲動向から、まき網、定置網ともに今期はまとまった漁獲がないと考えられる。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2025年8月～12月)

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、底曳網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：0歳魚(2025年級群)、1歳魚(2024年級群)、2歳魚(2023年級群)、
3歳魚(2022年級群)、4歳魚(2021年級群)、5歳魚(2020年級群)、
6歳(2019年級群)以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾(まき網、定置網等)

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバを主体とするサバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、北薩～薩南海域、日向灘では20cm～36cm(0歳魚～3歳魚)主体、豊後水道南部では20cm～30cm(0歳魚、1歳魚)主体、土佐湾では30cm～38cm(3歳魚～5歳魚)主体。

2. 紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：サバ類全体としては前年並～下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは、28cm～36cm(2歳魚、3歳魚)主体に20cm～29cm(1歳魚)も漁獲される。

3. 熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバ、ゴマサバともに15cm～25cm(0歳魚)主体に、30cm～35cm(1歳魚～3歳魚)が漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域(棒受網、たもすくい)

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバは低調であった前年並。サバ類全体としては低調であった前年並。

(2) 漁期・漁場：期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。

(3) 魚体：ゴマサバは29cm～38cm(2歳魚、3歳魚)主体に、25cm～31cm(1歳魚)および34cm以上(4歳以上)も漁獲される。

5. 犬吠埼沖～三陸海域、道東海域(まき網、定置網、底曳網)

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年並。4歳魚は前年並。5歳魚は前年を上回る。6歳魚は前年を下回る。マサバ全体としてはまき網では低調であった前年並～下回り、定置網では前年並、底曳網では前年を下回る。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては低調であった前年並～下回る。

(2) 漁期・漁場：定置網、底曳網では期を通じて漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は道東～三陸南部海域、11月～12月は三陸北部海域～犬吠埼沖に主に形成される。

(3) 魚体：マサバは24cm～37cm(2歳魚、3歳魚)主体に、20cm～30cm(1歳魚)および28cm以上(4歳以上)も漁獲される。

漁況の経過（2025年1月～6月）および見通し（2025年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、加入量水準の極めて高い2013年級群の発生により2013年に急増した。その後、資源量は2018年の高い加入量により2019年まで横ばい傾向を示したが、2020年以降は減少傾向を示している。2013年級群の発生以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2019年級群（6歳魚）は、2024年12月時点の資源評価（状態空間資源評価モデル；SAM）による推定加入量が53億尾と近年（2014～2023年）の平均（77億尾）を下回る水準である。

2020年級群（5歳魚）は、推定加入量が83億尾と近年の平均程度の水準である。

2021年級群（4歳魚）は、推定加入量が88億尾と近年の平均程度の水準である。

2022年級群（3歳魚）は、推定加入量が72億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（2歳魚）は、推定加入量が35億尾と近年の平均を下回る水準である。

2024年級群（1歳魚）の加入量は、2024年北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月）から、近年の平均を下回る水準と推定されている。

2025年級群（0歳魚）は、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、2025年北西太平洋北上期浮魚類資源調査における平均CPUEは前年の同調査より高い値を示したが、近年の平均値より低い値を示したことから、近年の平均を下回る水準と見込まれる。

2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2023年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となっている。

2020年級群（5歳魚）は、2024年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が3.9億尾と近年の平均（5.1億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2021年級群（4歳魚）は、推定加入量が4.0億尾と近年の平均を下回る水準である。

2022年級群（3歳魚）は、推定加入量が4.2億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（2歳魚）は、推定加入量が9.0億尾と近年の平均を上回る水準である。

2024年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均程度の水準と推定されている。

2025年級群（0歳魚）は、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、漁獲が低調であった前年を上回って推移しているものの近年の平均程度の水準と見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0歳魚（2025年級群）は、調査船調査の結果から加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は低調であった前年を上回る。1歳魚（2024年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並。4歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並。5歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。6歳（2019年級群）以上の来遊量は前年を下回る。全体の来遊

量は前年並～下回る。資源評価では 2020 年以降は資源量が減少傾向にあると推定されており、マサバの来遊量は、道東海域、三陸海域～犬吠埼沖では前年並～下回る。ただし、黒潮続流、暖水塊および親潮の影響により漁況は左右される可能性がある。三陸海域の定置網では前年並、底曳網では前年を下回る。伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁獲量は、犬吠埼以北海域のまき網は0.8千トン（前年同期実績1.0千トン）、犬吠埼以北海域の定置網、底曳網等は6.9千トン（同17.5千トン）、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は1.8百トン（同3.1百トン）、伊豆半島～駿河湾～熊野灘のまき網・定置網は1.6千トン（同1.4千トン）、紀伊水道外域～北薩海域の全漁業では3.1千トン（同2.8千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1月～6月の魚体は次のとおりであった。犬吠埼以北海域のまき網では、1月は24 cm～32 cmの2歳魚および3歳魚が主体に30 cm～39 cmの4歳以上も漁獲され、4月は19 cm～24 cmの1歳魚が主体に、6月は25 cm～26 cmの2歳魚を主体に20 cm～34 cmの1歳魚～5歳魚が漁獲された。三陸海域の定置網では、1月、2月は24 cm～35 cmの2歳魚～4歳魚が主体に、19 cm～24 cmの1歳魚および30 cm～47 cmの4歳以上も漁獲され、3月～5月は25 cm～35 cmの2歳魚～4歳魚が主体に、6月は27 cm～38 cmの3歳以上が主体に漁獲された。三陸海域の底曳網では、1月、2月は24 cm～32 cmの2歳魚、3歳魚が主体に、3月、4月は20 cm～31 cmの1歳魚～3歳魚が主体に、5月、6月は27 cm～35 cmの2歳魚～5歳魚が主体に漁獲された。産卵場である伊豆諸島周辺海域では主に伊豆諸島北部海域が漁場となり、29 cm～38 cmの3歳以上が主体に漁獲された。駿河湾～北薩海域では、伊豆諸島周辺海域と同様の組成に加え、30 cm以下の0歳魚～2歳魚も漁獲された。

本予測期間は、犬吠埼以北海域のまき網、定置網、底曳網での漁獲が中心となり、2歳以上が主体に1歳魚も漁獲される。水産資源研究所海洋環境部の「2025年度東北近海の8～10月のマサバ漁場予測」によると、本年の夏季～秋季は三陸南部海域がマサバの主漁場となりやすい水温環境であることから、まき網漁場は8月～10月は道東～三陸南部海域に、11月～12月は三陸北部海域～犬吠埼沖に形成される。三陸海域の定置網、底曳網では期を通じて断続的に漁獲される。

伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準ではあるが、熊野灘では0歳魚主体、紀伊水道外域では2歳魚、3歳魚主体、豊後水道南部、日向灘では0歳魚、1歳魚主体に、散発的な漁獲がみられる。

漁獲の主体となる犬吠埼以北海域の年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚：20 cm～30 cm前後、2歳魚：24 cm～34 cm前後、3歳魚：26 cm～37 cm前後、4歳魚：28 cm～39 cm前後、5歳魚：30 cm～40 cm前後、6歳以上：32 cm以上。0歳魚は伊豆諸島以西で主に漁獲され、例年の傾向から15 cm～25 cm前後と予測される。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0歳魚（2025年級群）は、直近までの漁況を考慮すると加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年並。1歳魚（2024年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。3歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並。4歳（2021年級群）以上は残存資源量が少なくなっており、漁獲の主体とならない。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域では前年並、日向灘では前年を下回り、豊後水道南部西側では前年並～上回り、豊後水道南部東側では前年を下回り、土佐湾では前年を上回り、伊豆諸島周辺海域では低調であった前年並。紀伊水道外域では黒潮の流路により大きく左右

されるため、現時点では予測が困難、熊野灘では低水準、犬吠埼沖では混獲される程度にとどまり、全体としては低調であった前年並の来遊量となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁獲量（全漁業）は、北薩～紀伊水道外域は5.2千トン（前年同期実績5.6千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は4.0千トン（同2.9千トン）、犬吠埼以北海域は0.8千トン（同2.3千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1月～6月の漁獲の主体は、北薩～薩南海域では1歳魚～3歳魚、日向灘～豊後水道南部では1歳以上、熊野灘では2歳以上、伊豆諸島周辺海域では2歳魚～4歳魚、犬吠埼沖～三陸海域では0歳魚～5歳魚であった。

本予測期間における各地の漁期・漁場と魚体は、北薩～薩南海域、日向灘では0歳魚～3歳魚主体、豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、熊野灘では0歳魚主体に、それぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、伊豆諸島北部海域を中心に2歳魚、3歳魚主体に1歳魚、4歳以上が混じり、期を通じて漁場が形成されるが、黒潮流路によっては三宅島周辺海域、銭洲海域にも一時的に漁場が形成される。犬吠埼以北海域のまき網、底曳網では混獲される程度にとどまり、定置網では一時的にまとまった漁獲がみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。0歳魚：20 cm～25 cm 前後、1歳魚：25 cm～32 cm 前後、2歳魚：28 cm～35 cm 前後、3歳魚：30 cm～37 cm 前後、4歳以上：33 cm 以上。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産海洋研究センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
茨城県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
千葉県水産総合研究センター	宮崎県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	鹿児島県水産技術開発センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	
三重県水産研究所	